

[博士論文審査要旨]

申請者：兒玉 公一郎

論文題名「技術変化への適応メカニズム：写真プリント業界による写真のデジタル化への対応を事例として」

審査員 沼上 幹
加藤俊彦
清水 洋

本論文は、大規模な技術変化に対して、技術システムとビジネス・システムがどのように適応していくのかを事例研究を通じて考察したものである。本論文でとり上げられた事例は、写真プリント業界である。デジタルカメラの登場によって、現像と写真プリントについては既存のラボを使わずに自宅でインクジェット・プリンターを使うという選択肢が登場し、既存のラボ（大規模な現像所や小規模な街場のミニラボ）は消滅するという予想が多々見られた時代があった。実際、デジタルカメラ登場の初期には、多くの人々が自宅におけるインクジェット・プリンターの出力を選択していた。しかし、最近ではデジタル・ミニラボによる「お店プリント」が一定の市場シェアを得て存続している。このような大規模な技術変化に直面した銀塩のプリント技術と街場のミニラボなどがなぜ、どのようにして存続できたのかというのが本論文の基本的な問いである。この問いに対して、兒玉氏が出した答えは、①当初高画質化を求めて開発されたデジタル・ミニラボが、②その後、デジカメの出力装置として見直され、③キタムラのような先進的なミニラボ・チェーンが、自ら進んでデジタル・ミニラボに大胆な投資を行なうと共に、ミニラボ・メーカーと共同で注文容易化の機器を開発するなど、デジカメ時代に適応するための「標準的な解」の構築に先導的な役割を果たし、④その「標準的な解」に他のミニラボが追随することでデジカメからの出力を簡便に行なう社会インフラが早期に構築され、⑤その結果、消費者がミニラボで写真をプリントするという習慣が保持されている間にビジネス・システムの転換が可能になった。それ故に、ミニラボ店は存続できたのだというのが本論文の主張である。

本論文の優れた点は、まず第 1 に、多様なデータソースを用いて、適切なエビデンスを示しながら、非常に興味深い知見を積み重ねて、丁寧に事例分析を行なっていることである。インタビュー・データも用いているが、特に多様な資料を駆使した数字の加工には多くのオリジナルな工夫が見られる。第 2 に、歴史的なプロセスの記述の中に、大変興味深い議論が盛り込まれている点である。たとえば、先行者のキタムラの努力が後発者にフリーライドされると共に、後発者の追随によってキタムラも大きな利益を得ていたことなどは大変興味深い指摘である。第 3 に、技術システムとビジネス・システムの両面から大規模な技術変化への適応プロセスを捉えるというアプローチには新しさとポテンシャルがあると思われる点も指摘できるであろう。

もちろん、本論文には問題も残されている。競合であるインクジェットの技術進化と企業戦略について、もう少し詳しい分析が必要である点や、既存の理論との対比にもう少し多くの議論を追加できる余地が残されている点などである。

しかしながら、これらの問題点は本論文の基本的な貢献と価値を損なうものではなく、現時点でも本論文は非常に高い学術的貢献を生み出していると審査員一同は考えている。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせて考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第 5 条第 1 項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。